

パウロが教会を「キリストの体」と呼んでいることは大変有名なことです。パウロは、一つの体が多くの部分から成っているということを、教会を説明するための単なる比喻としてではなく、「キリストの体」という一つの具体的な体として述べています。教会こそキリストの体であり、そこに連なる私たちは文字通りその部分なのです。パウロは、「教会という体は単に各部分の結合、集合によって組み立てられ、生じているのではなく、個々の部分が一つの体である教会の中に組み入れられている。そして、その各部分に違いがあることを前提にして、体は一つであり、キリストの体にあっては各部分の差別はない。」と述べています。洗礼を受けることによって、民族的あるいは社会的違いをもっている私たちは差別がなくなり、一つの体、キリストの体へと組み入れられ、その部分となるのです。「皆一つの霊をのませる」という言葉は、聖霊が私たちの外側にいて働くだけでなく、私たちの内に宿って、内側から私たちを作り変えることを表現していると思われまゝ。各部分である教会員が集まって、組み立てられ、体である教会ができるのではないのです。私たちは、予め与えられた「キリストの体」に組み入れられるのです。それがパウロが述べた体は二つの方向（一→多、多→一）を同時に持っているという意味だと思われまゝ。つまり、教会はキリストが作るもので、キリスト者はそれに参与するのです。私たちにそれぞれ違った賜物が与えられています。それは神さまが様々な違った者たちによってキリストの体を作り上げようとしているからです。従って、自分に与えられている賜物を他人と比べる必要はなく、神さまから与えられた自分の賜物を精一杯用いていけばよいのです。パウロが語ろうとしている最も大事なことは、私たちはキリストの体の部分としてキリスト者と共に歩むことです。教会においてどんなよい働きができるか、ということが重要ではありません。神さまは、私たちが、どんなに弱い、見劣りがする者であっても、他のキリスト者と共にキリストの体の部分として生きることを望まれます。反対に、どんなに優れた能力を持ち、立派な奉仕をすることができるとしても、キリスト者と共に歩むことを忘れるならば、神さまはそのような働きを望まれないのです。

私たちが教会総会の時に読み上げる「私たちの教会の姿勢」は依田駿作牧師が言われた「本郷台教会の目標としていること」を発展させたものです。教会の一人ひとりはお互いの違いを認め合い、理解し合い、一人ひとりの人格を認め、受け入れあうことによって「共に歩む」「共に生きる」ということを教会において具体化していくことが大事なことだと思っております。